

12世紀ビザンツの歴史書『アレクシオス1世伝』 をめぐる研究動向¹⁾

佐伯(片倉)綾那

はじめに

ビザンツ帝国(330-1453年)において、数多くの年代記や歴史書が編纂された²⁾。とりわけ、11世紀から12世紀のコムネノス朝時代(1081-1185年)は、歴史叙述がもっとも盛んであった³⁾。中でも12世紀半ばに書かれた歴史書『アレクシオス1世伝』(*Alexias*, 全15巻)⁴⁾は、コムネノス朝の創設者アレクシオス1世コムネノス(*Alexios I Komnenos*, 在位年1081-1118, 以下アレクシオス1世と記す)による即位前から在位中の事績を伝えており、豊富な情報量と多岐にわたる内容から最も優れた歴史書と評される。加えて、『アレクシオス1世伝』は、ビザンツ帝国で女性が書いた唯一の歴史書として注目されてきた。著者はアレクシオス1世の娘アンナ・コムネナ(*Anna Komnene*, 生没年1083-1153/54, 以下アンナと記す)である。彼女は、内憂外患で疲弊していたビザンツ帝国を立て直した英雄として父を称賛している。

『アレクシオス1世伝』への高い関心だけでなく、波乱に満ちた生涯から著者アンナにも関心もたれてきた。『アレクシオス1世伝』の史料分析、アンナの教養や政治へのかかわりが研究されたことで、『アレクシオス1世伝』は単なる父への称賛文ではなく、帝位をめぐる争った実弟ヨハネス2世(*Ioannes II Komnenos*, 在位年1118-1143, 以下ヨハネス2世と記す)⁵⁾批判を紛れ込ませている歴史書と、指摘されるようになった。

アンナは、皇帝アレクシオス1世と皇妃エイレーネー・ドゥーカイナ(*Eirene Doukaina*, 生没年1066頃-1133頃, 以下エイレーネーと記す)の長子としてポルフェラ(緋紫色)の部屋で誕生した。この部屋は、首都コンスタンティノーブルの皇帝宮殿にあった皇妃専用の産室のことで、壁が紫斑岩でできていた、もしくはポルフェラ色で飾られていたと言われる。その部屋で誕生した皇子と皇女は「ポルフェロゲネトス(*πορφυρογέννητος*: 緋紫色の産室生まれである者)」と呼ばれ、宮廷で特別な存在とみなされた⁶⁾。彼女は誕生後すぐ、アレクシオス

1世によって、彼の後継者コンスタンティノス・ドゥーカス(*Constantinos Doukas*, 生没年1074頃-1094頃, 以下コンスタンティノスと記す)と婚約させられ、彼と共に将来の帝位継承者とみなされた。しかし1087年に弟ヨハネスが誕生し、1092年に彼が後継者に指名されたことで、コンスタンティノスとアンナの帝位継承権は無効になる。1094年のコンスタンティノス死後、1097年にアンナは有力貴族の一人ニケフォロス・ブリュエンニオス(*Nikephoros Bryennios*, 生没年1064もしくは1080頃-1136/37, 以下ニケフォロスと記す)と結婚する。その後、アレクシオス1世死亡前の1118年と、ヨハネス2世即位後の1119年に、彼女は夫ニケフォロスを皇帝にしようと企てる。しかし2件の事件は未遂に終わり、彼女は宮廷を出て、コンスタンティノーブルに母エイレーネーが創建したケカリトメネ修道院に移る。そして修道院で隠遁生活を始めて約30年後の1148年頃から『アレクシオス1世伝』執筆を開始し、1153/54年頃に亡くなる直前まで執筆を続けた。アンナの生涯は、帝位を狙ってヨハネス2世に陰謀を起こした前半生と、『アレクシオス1世伝』を執筆した後半生とに分けることができる。

筆者は、アンナが『アレクシオス1世伝』でヨハネス2世批判を試みた、という点に関心をもっている。そこで本稿では、『アレクシオス1世伝』にヨハネス2世批判が込められていたとする研究を中心に整理する。その際、『アレクシオス1世伝』研究におけるアンナ評価の変遷を辿るとともに、1996年に発表された著者問題をみていく。さらに『アレクシオス1世伝』に見出される新たな可能性について言及する。

1. 『アレクシオス1世伝』研究の回顧

(1) 著者アンナ評価の変遷

18世紀にエドワード・ギボンによって書かれた『ロー

マ帝国衰亡史』では、アンナは教養ある女性であるとみなされているが、傲慢で横柄であり、『アレクシオス1世伝』はその気取った文体で虚栄心に満ちていたと、否定的に評価されていた⁷⁾。しかしながら、ビザンツ史家によって『アレクシオス1世伝』の史料的価値が評価されると、アンナの評価も一変する。1927年にシャルル・ディールが発表したビザンツ皇妃研究において、アンナに一章が設けられその生涯が紹介される⁸⁾。1929年にイギリスのビザンツ史家ジョージナ・バックラーがアンナと『アレクシオス1世伝』に関する初めて包括的な研究を発表する⁹⁾。バックラーの研究は、全15巻からなる『アレクシオス1世伝』の注釈書としての側面をもち、またその著者アンナについて、誕生、結婚、教養、当時の宮廷について、彼女の自己憐憫、弟ヨハネス2世への不満などを、詳細に伝えている。いずれの研究も、アンナは歴史『アレクシオス1世伝』を執筆した高い教養ある女性として、注目されてきた。

1980年代後半に女性史とジェンダー史がビザンツ史にも採り入れられるようになると、『アレクシオス1世伝』に描かれた女性から、11世紀から12世紀にかけてのアンナを含めたビザンツ皇族女性の立場や役割を読み取る場として、主に女性研究者によって注目されるようになる。リング・ガーランドは『アレクシオス1世伝』を、一人の女性が自身の言葉で男性著述家に挑戦したとみなし、11世紀から12世紀の社会における女性や女性の役割に対するビザンツ人の姿勢を明らかにしたと評する¹⁰⁾。

『アレクシオス1世伝』には、女性や女性の動きが多く描かれている。彼女たちはアンナの親族であり、アレクシオス1世の即位を助けた。例えば、アンナの父方の祖母アンナ・ダラセナ(Anna Dalassene, 以下ダラセナと記す)は息子アレクシオス1世の即位を助け、また即位後にアレクシオス1世が遠征で不在時には、行政を預かる。アンナの母方の祖母ブルガリアのマリア(Maria of Bulgaria)は、自身の娘でアンナの母エイレーネーの夫アレクシオス1世の即位を支援した。アラニアのマリア(Maria of Alania)は、息子でアンナの婚約者コンスタンティノスの継承権を守るために、アレクシオス1世の即位を助ける。さらにエイレーネーは娘アンナとその夫ニケフォロスが、ヨハネス2世に代わって帝位に就くことを支持した。これら女性たちを描いた叙述から、当時の皇族女性たちの多くが寡婦として自身の子どもの政治上の権利を守る立場から政治にかかわっていたと、みなされた。

アンナが政治に関わる女性の姿を詳細に描き出したことについて、研究者はアンナ自身政治に参加することを試みるも挫折したことに関連付ける。アンナによる挫折とは、1118年と1119年に実弟ヨハネス2世の帝位を狙っ

てクーデターを起こすも未遂に終わったことであった。しかしアンナは『アレクシオス1世伝』において、クーデターについて何も語っていない¹¹⁾。マーガレット・マレットやバーバラ・ヒルは夫を皇帝にするという帝位継承の媒体になれなかったアンナの憤りを読み取る¹²⁾。さらにヒルは、それらの叙述がアンナ自身の政治参加を正当化するものであったと指摘する¹³⁾。さらに、ヒルはフェミニズムの視点から、アンナがフェミニストであったかどうかという問いを立てて分析を試みている¹⁴⁾。以上のように、『アレクシオス1世伝』の女性に関する叙述から、アンナによるヨハネス2世への個人的な感情を読み取ろうとする。

近年、女性史家ジュディス・ヘリンは、ビザンツ史の概説としてはアンナに初めて一章を割いた¹⁵⁾。レオノーラ・ネヴィルは、ヨハネス2世に対するクーデターを注目する際、アンナに注目しすぎる傾向を批判する¹⁶⁾。またネヴィルは、アンナが自身の不運を嘆く記事を『アレクシオス1世伝』から取り上げ、古代ギリシアの悲劇の枠組みからアンナの嘆きをとらえている¹⁷⁾。また、ペネロペ・バックラーによって『アレクシオス1世伝』の研究書が刊行された¹⁸⁾。バックラーは、バックラーがこの書を歴史書として位置付けるのに対し、文学作品として位置付けている。

(2) 『アレクシオス1世伝』の著者問題

『アレクシオス1世伝』とアンナに関心をもたれてから、その著者がアンナであることに、疑義が呈されることはなかった。しかし1996年にジェームズ・ハワード＝ジョンストンによって、『アレクシオス1世伝』の本当の著者はアンナの夫ニケフォロスであり、アンナはニケフォロスの原稿を使って編集作業を行なったにすぎない、との説が発表された¹⁹⁾。

ここで『アレクシオス1世伝』が執筆された背景を述べる。『アレクシオス1世伝』は、当初、アンナの母エイレーネーによる依頼により、アンナの夫ニケフォロスが書くことになっていた。しかしニケフォロスは1137年頃、アレクシオス1世即位前まで書きあげ未完のまま亡くなったので²⁰⁾、アンナがアレクシオス1世の事績を『アレクシオス1世伝』として書いた。

「アンナ・コムネナはニケフォロス・ブリュエンニオスの草稿を編集したに過ぎない」というハワード＝ジョンストン説に、国内外から反論が起こった。海外では2000年に論文集²¹⁾が刊行され、多方面からハワード＝ジョンストン説に批判が試みられた。論文集の執筆者の一人ヒルは、ハワード＝ジョンストンの「女性であるアンナに詳細な軍事事項を描くことができなかった」という点に反論する²²⁾。国内では井上浩一氏が、ハワード＝ジョンストンがその存在を推定する、ニケフォロスの草

稿いわゆる『原アレクシオス1世伝』の存在に疑問を投げかける²³⁾。ネヴィルは、ヒル同様、ハワード＝ジョンストンの「アンナが軍事の経験に関する情報を入手できたかどうか」と言う点に反論する²⁴⁾。彼女の反論はヒルと異なり、ニケフォロスの描く軍事や戦闘場面は戦場の経験よりむしろ古典に描かれた戦争場面を読んで得た情報であるという。そしてアンナもまたニケフォロスと同様の手段を使っており、テキストに描かれた戦争を男性も女性も読むことができた、彼女は解釈する。そのことから、アンナに軍事の経験がないことは、彼女が、ニケフォロスによってすでに書かれていた戦いと包囲攻撃の叙述を必ずしもあてにしていなかったであろう、と指摘している。筆者もまた、アンナが編集したのみとは考えていない。彼女は自分自身のことを頻りに描いており、それらの叙述からアンナ自身の考えが読み取れるからである。現在ではアンナが『アレクシオス1世伝』の著者であることに落ち着いている。

2. 批判書としての『アレクシオス1世伝』

『アレクシオス1世伝』は、アレクシオス1世の称賛文といわれており、それについては否定されるものではない。それだけではなく、ヨハネス2世とマヌエル1世(Manuel I, 在位年1143-1185, 以下マヌエル1世と記す)の治世を批判しているとも言われる。全15巻の『アレクシオス1世伝』の中で、直接彼らの名前を挙げなくとも、彼らを批判していると指摘される箇所が2つある。それが14巻3章9節と14巻7章6節である。

14巻3章9節は、アレクシオス1世がトルコ人との戦いで平和を結び平和をもたらしたにもかかわらず、「彼の後継者たち」がアレクシオス1世のもたらした平和をだめにしてしまったと、伝える記事である。またポール・スティーンソン、ポール・マグダリーノとネヴィルは、アンナが1147年から1148年のマヌエル1世による対第二回十字軍政策の不手際を批判していると言²⁵⁾、またティンネフェルトは、アンナがヨハネス2世の統治に対する不満を表していると言²⁶⁾。さらにスティーンソンは、マヌエル1世による対第二回十字軍政策の不手際を指していると言ったことから、『アレクシオス1世伝』が書かれたのは1148年頃と推定する²⁷⁾。

14巻7章6節は、アンナが1119年のヨハネス2世への陰謀に失敗後の修道院の生活において、アンナは、他の人と会ったり話したりすることを「時の権力者たち」によって許されていなかったと語る記事である²⁸⁾。アンナがヨハネス2世とマヌエル1世による自らの扱いに不満を述べているが、修道院での彼女の生活は、彼女が言

うほどに孤独な生活ではなかった²⁹⁾。

しかしながら、上述した史料からだけではなく、次に述べる十字軍に関する記事や、アンナによる執筆手法が検討され、マヌエル1世批判であるとする研究者とヨハネス2世批判であるとする研究者に分かれるようになった。

(1) マヌエル1世批判

『アレクシオス1世伝』はその内容の大部分が戦争に関する記事であり、とりわけ11世紀末に始まった第一回十字軍に対するアレクシオス1世の対応に多くを割いている。トマスはアンナによる第一回十字軍に関する記事から、現皇帝マヌエル1世の政策との比較とみる³⁰⁾。マグダリーノは、『アレクシオス1世伝』が12世紀のコンスタンティノーブルで書かれたという背景からマヌエル1世の政策に対する批判とみる³¹⁾。

スティーンソンは、アンナの「あらゆる人々が今の支配者にお世辞を言うが、しかし故人を称えるものはいなかった。」という『アレクシオス1世伝』14巻7章の記事から、甥マヌエル1世の時代に、マヌエル1世に対するお世辞の中で自身の父アレクシオス1世が軽んじられていたことをアンナは示唆している、と述べる³²⁾。ヘリンもスティーンソンと同様の見解を示し、彼女は、アンナの描く『アレクシオス1世伝』が、12世紀半ばの宮廷修辭家たちがマヌエル1世の皇帝としての姿や軍人としての武勇を称えて創り上げた政治的なプロパガンダに対抗するものとして描かれたと述べる³³⁾。ネヴィルは、アンナの夫ニケフォロスが著作『歴史の素材』の中で、ニケフォロスと同名の祖父ニケフォロス・ブリュエンニオスを称えており、ネヴィルは『歴史の素材』に隠されたアレクシオス1世批判を読み取る。ニケフォロスによる隠された批判という手法を、アンナは『アレクシオス1世伝』の中でマヌエル1世に対して行なっていると論じている。アンナによるアレクシオス1世の描き方は、夫ニケフォロスの描くアレクシオス像に逆らって描いたものであり、彼女の著作は夫の著作への反駁であるにとらえている³⁴⁾。

(2) ヨハネス2世批判

バックラーは、『アレクシオス1世伝』からアンナの皇妃になれなかった不運への嘆きを読み取っているが、しかしヨハネス2世については、彼の容姿を語る際に悪意が見いだせるも、彼が洗礼を受け共治帝の冠を授けられたと語るアンナから悪意は読み取れないとする³⁵⁾。マグダリーノも、『アレクシオス1世伝』に描かれるヨハネス2世共治帝戴冠の様子や彼の誕生場面から、アンナによるヨハネス2世批判は読み取れないとし、むしろ対外政策から批判を読み取る³⁶⁾。

井上氏は、アンナによるヨハネス2世への反発を、原史料を自分の言葉で統一せずそのまま引用するというビザンツ帝国の歴史書の伝統から逸脱したアンナによる『アレクシオス1世伝』の編集作業から見出す。アレクシオス1世が母ダラセナに行政の実権を委託した金印文書をそのまま引用することで、女性も政治に参加できることを、また1107年のアレクシオス1世によるアンティオキア征服時に結ばれたディアボリス条約を引用することで、1137年のヨハネス2世によるアンティオキア征服は父の二番煎じであることを、アンナは著作の中で言いたかった、と井上氏は述べる³⁷⁾。さらに井上氏は、アレクシオス1世の十字軍政策を詳しく述べることで、ヨハネス2世とその息子マヌエル1世の十字軍に対する態度を批判したと、指摘する³⁸⁾。

筆者は、11世紀から12世紀ビザンツの皇族女性の立場に関する見解に依拠して、ダラセナ、ブルガリアのマリア、アラニアのマリアら3人の皇族女性がかかわった政治的な動きと、同時代史料から読み取ったヨハネス2世への陰謀を企てたアンナの行動と『アレクシオス1世伝』に描かれたアンナによるヨハネス2世の叙述とを比較して、アンナの独自性を浮き彫りにした。彼女の独自性は、他の皇族女性が母親として行動を起こしたのに対して、アンナは、皇妃専用の緋紫色の産室で生まれた皇子と皇女を指し宮廷で特別な存在とみなされた「ポルフィロゲネトス」であることにアイデンティティを見出して自分のために行動した点にある。そのことから『アレクシオス1世伝』を、アンナが「ポルフィロゲネトス」に彼女自身のアイデンティティを見出してヨハネス2世への不満を表した、と述べた³⁹⁾。

草生久嗣氏は、『アレクシオス1世伝』のアレクシオス1世によるペチェネグ人との戦争に関する叙述に着目する。アンナが、ヨハネス2世による1122年のペチェネグ戦争の勝利とその勝利の祝祭を意識し、アレクシオス1世がペチェネグ人との戦争に決着をつけたという印象を与える描き方をしたと指摘する⁴⁰⁾。

対外政策の点からヨハネス2世批判を読み取ることは首肯できる。しかし筆者は、アンナが「ポルフィロゲネトス」を道具として、またバックラーやマグダリーノがヨハネス2世批判を読み取れないとしたヨハネス2世戴冠記事と誕生場面から、より強いヨハネス2世批判をアレクシオス1世の事績の中に紛れ込ませたと論じた⁴¹⁾。

「ポルフィロゲネトス」は、ビザンツ帝国において、陰謀が絶え間なかった宮廷で皇帝が自身の権力を補強する手段であり、帝位継承にかかわる概念であった。ジルベール・ダグロンはコムネノス朝期を、「ポルフィロゲネトス」の尊厳があらゆる人々と、それを誇示できるすべての人々によって高らかに主張された時代と位置付け、

そのような時代の中でアンナは『アレクシオス1世伝』に、ポルフィラ生まれであることとポルフィラの部屋について描いた、と指摘している⁴²⁾。その流れを受けてヴラダ・スタンコビッチは、コムネノス家の時代に「ポルフィロゲネトス」の使われ方が変化したと指摘し⁴³⁾、またヨハネス2世が「ポルフィロゲネトス」であることを強調し、自身の帝位を脅かす身内に対抗していたという⁴⁴⁾。しかし、アンナが著作内で「ポルフィロゲネトス」を使っていたことが、ダグロンの言うような風潮を生じさせたともいえる。アンナが自身のアイデンティティを「ポルフィロゲネトス」であることに求めていることを、井上氏、ヘリン、筆者は指摘する⁴⁵⁾。アンナは、同じく「ポルフィロゲネトス」であるヨハネス2世と張り合い、同時に彼を批判する手段としていた。アンナがとった手段とは、『アレクシオス1世伝』の中で、自身が「ポルフィロゲネトス」であることを繰り返し述べ、アレクシオス1世とヨハネス2世によって帝位から遠ざけられたコムネノス家以外の「ポルフィロゲネトス」である、アンナの婚約者コンスタンティノス、ニケフォロス・ディオゲネス、そしてアンナ自身を好意的に描くことにあったと考える⁴⁶⁾。

おわりに

本稿では、アンナへの評価の変遷を辿り、『アレクシオス1世伝』にヨハネス2世批判が込められていたとする研究を中心に考察してきた。アンナについては、否定的な評価から『アレクシオス1世伝』を書いた高度な教養をもつ女性という評価に変わった。そして女性の政治上の役割という視点から、アンナのヨハネス2世へのクーデターへのかかわりに注目された。アンナが著者であることに疑義が呈されるも現在は落ち着く。『アレクシオス1世伝』から、ヨハネス2世に帝位をめぐる争いで敗れたアンナの不満が読み取られてきた。『アレクシオス1世伝』が12世紀半ばに書かれたと推定されることから、マヌエル1世とヨハネス2世の政策を意識して書かれたとして読み取られた。しかし筆者は、『アレクシオス1世伝』には、より強いヨハネス2世批判が含まれており、アンナはその道具として「ポルフィロゲネトス」を用いたと考えた。アンナはクーデターを起こすことでヨハネス2世批判を試みるも失敗した後、アレクシオス1世の事績への称賛を隠れ蓑に、ヨハネス2世批判を試みたのではないかと考える。

今後の可能性として、すでに研究がされているペチェネグ戦争や十字軍以外に、ヨハネス2世の事績を意識して、アレクシオス1世の事績を描いたと考えられる部分がある⁴⁷⁾。アンナはマヌエル1世の治世初めの約10

年、1143年から1153/54年に執筆していたので、マヌエル1世を意識していたであろう。しかし、彼女は軟禁状態にあったとはいえ、ヨハネス2世の治世1118年から1143年を全て見聞きすることができた。またヨハネス2世に対する不満や批判は『アレクシオス1世伝』から読み取ることができる。そのことから、『アレクシオス1世伝』はマヌエル1世よりもヨハネス2世の治世を反映して書かれていたのではないか。『アレクシオス1世伝』に描かれた事件とアンナの一見個人的にみえる感情を精査することで、また彼女によるバイアスを意識した上で、アレクシオス1世とマヌエル1世にはさまれて、ややすれば陰も薄くなりがちなヨハネス2世時代を再検討するための素材にもなりうると思われる⁴⁸。それについては稿を改めたい。

註

1. 本研究の一部は、平成26年公益財団法人日本科学協会、笹川科学研究助成より研究費の支援を受けた。
 2. ビザンツ帝国における歴史書は、年代記と歴史の2つに分けることができる。年代記は天地創造に始まり現代まで時代順に事件を列挙したものである。その一方で歴史は回想録風の歴史書であり、『アレクシオス1世伝』はそれにあたる。井上浩一「ビザンツ年代記の編纂過程の史的価値——皇妃コンクール記事を中心に——」、『人文研究』（大阪市立大学文学部紀要）、第50巻第11分冊、1998年、34-41頁。
 3. ゲオルグ・オストロゴルスキー著、和田廣訳『ビザンツ帝国史』、恒文社、2001年、459頁。J. Chrysostomides, “A Byzantine Historian: Anna Comnena”, in D. O. Morgan (ed.), *Medieval Historical Writing in the Christian and Islamic Worlds*, London, 1982, p. 30.
 4. 1150年前後に書かれたアンナによる原本は現存しない。写本系統は大きく2つに分かれる。1つは、12世紀に作られたF写本の系統、もう1つは14世紀ごろに作られたC写本とV写本の系統である：D. R. Reinsch, “Zum Text Der Alexias Anna Komnenes”, *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik* 40, S. 233-268。『アレクシオス1世伝』の刊行は、17世紀に入ってから主にドイツでなされ、それ以後主に欧米の各国で翻訳される。1928年、エリザベス・ドーズによって初めて英語訳が刊行される。ベルナルド・レイブが1937年から1945年にフランス語訳とギリシア語対訳版の三巻本を、ポール・ゴートイエが索引を公刊するAnne Comnène, (texte établi et traduit par B. Leib, index par P. Gautier), *Alexiade: règne de l'empereur Alexis I Comnène, 1081-1118*, 4 vols, Paris: Les Belles lettres, 1937-1945 (2006), Index par P. Gautier。これには詳細な史料解題がついており、長らく研究者が史料引用の際に用いてきた。1969年にペンギンブックスから出版されたスターによる英訳は、一般読者にも読みやすいものになっているAnna Comnena, (trans. by E. R. A. Sewter), *The Alexiad of Anna Comnena*, Harmondsworth, 1969。1996年にドイツ語訳が出るも2001年に第二版が刊行されるAnna Komnene, *Alexias*, (Übersetzt eingeleitet und mit Anmerkungen versehen von D. R. Reinsch), Berlin, 2001 (Auflage 2)。2001年に入ってから、同じくドイツからギリシア語版Anna Komnene, (recensuerunt: D. R. Reinsch et A. Kambylis), *Annae Comnenae Alexias*, *Corps Fontium Historiae Byzantinae* 40, Berolini, 2001が刊行される。2009年には、スター英訳の版にフランコパンが新たな注釈をつけ
- たものが発表されたAnna Komnene, (trans. by E. R. A. Sewter, revised with Introduction, and Notes by P. Frankopan), *The Alexiad*, London, 2009。以下、引用時、「Alexias, 巻, 章, 節, ギリシア語版の頁」の順に記す。
5. 同時代人や研究者からは、ビザンツ帝国史上、屈指の名君と評される。Niketas Choniates, (recensuit: van I. A. Dieten), *Nicetae Choniatae Historia*, *Corps Fontium Historiae Byzantinae* 11, Berolini, 1975, 以下、「Choniates, 頁」と記す; John Kinnamos (trans. by C. M. Brand), *Deeds of John and Manuel Comnenos*, New York, 1976; F. Chalandon, *Jean II Comnène (1118-1143) et Manuel I Comnène (1143-1180)*, Paris, 1912; M. Angold, *The Byzantine Empire 1025-1204: A Political History*, London and New York, 2nd Edition 1997, pp. 181-190; 井上浩一『ビザンツ皇妃列伝 憧れの都に咲いた花』、筑摩書房、1996年、187頁（白水Uブックス、2009年、216頁）。
 6. ジュディス・ヘリン著、井上浩一監訳、足立広明、中谷功治、根津由喜夫、高田良太訳、「第17章 皇帝の子供たち——「緋産室の生まれ」」、『ビザンツ 驚くべき中世帝国』、白水社、2010年、252-253頁（J. Herrin, “17 Imperial Children, ‘Born in the Purple’”, *Byzantium: The Surprising Life of a Medieval Empire*, Princeton, 2008, pp. 185-186）。A. P. Kazhdan (editor in chief), *Oxford Dictionary of Byzantium*, New York, 1991, p. 1701; R. Janin, *Constantinople Byzantine: Développement urbain et répertoire topographique*, Paris, 1964, pp. 121-122.
 7. エドワード・ギボン著、中野好之訳『ローマ帝国衰亡史』、筑摩書房、第8巻、1991年、206頁、第9巻、1992年、216頁、236頁。一方で、ギボンはヨハネス2世を高く評価している。同書、第8巻、208-209, 212, 224頁。
 8. C. Diehl, (trans. by H. Bell, T. de Kerpely), *Byzantine Emperresses*, New York, 1963, pp. 174-197.
 9. G. Buckler, *Anna Comnena A Study*, Oxford, 1929 (reprints 1968)。しかしその前年、スコットランドの小説家で詩人ナオミ・ミッチソンによるアンナを描いた小説が発表された。N. Mitchison, *Anna Comnena*, 1928, reprinted, with an introduction by Isobel Murray, Glasgow: Kennedy & Boyd, 2009。1972年には近代ギリシア文学者ラエ・ダルヴェンによってアンナの伝記が書かれたR. Dalven, *Anna Comnena*, Twayne's World Authors Series, New York, 1972。
 10. L. Garland, “The Life and Ideology of Byzantine Women: A Further Note on Conventions of Behaviour and Social Reality as Reflected in Eleventh and Twelfth Century Historical Sources”, *Byzantion* 58, 1988, p. 361.
 11. クーデターの経緯については、12世紀から13世紀のビザンツ歴史家ヨハネス・ゾナラスとニケタス・コニアテスが詳しいIoannes Zonaras, (editit T. Büttner-Wobst), *Ioannis Zonarae Epitomae Historiarum*, vol. 3, Bonnae Impensis Ed. Weberi, 1897, pp. 761-764; Choniates, pp. 5-9。アンナの沈黙は、「故意の沈黙」とみなされる。ビザンツの歴史家がしばしば用いる手法であった。井上浩一「アンナ・コムネナ『アレクシオス伝』——著者問題をめぐって——」、『人文研究』（大阪市立大学大学院文学研究科紀要）第54巻第2分冊、2003年、92頁。
 12. M. Mullett, “Alexios I Komnenos and Imperial Renewal”, in P. Magdalino (ed.), *New Constantines: The Rhythm of Imperial Renewal in Byzantium, 4th-13th Centuries*, Aldershot, 1994, p. 262; B. Hill, “A Vindication of the Rights of Women to Power by Anna Komnene”, *Byzantinische Forschungen* 23, 1996, p. 46.
 13. B. Hill, *Ibid.*, p. 46.
 14. B. Hill, “Actions Speak Louder than Words: Anna Komnene's

- Attempted Usurpation”, in T. Gouma-Peterson (ed.), *Anna Komnene and Her Times*, New York and London, 2000, pp. 45-62.
15. ヘリン前掲書, 310-322頁 (Herrin, *op. cit.*, pp. 232-241)。
16. L. Neville, *Heroes and Romans in Twelfth-Century Byzantium: The Material for History of Nikephoros Bryennios*, Cambridge-New York, 2012, pp. 17-24.
17. L. Neville, “Lamentation, History, and Female Authorship in Anna Komnene’s *Alexiad*”, *Greek, Roman, and Byzantine Studies 53-1*, 2013, pp. 192-218.
18. P. Buckley, *The Alexiad of Anna Komnene—Artistic Strategy in the making of a Myth—*, Cambridge- New York, 2014.
19. J. Howard-Johnston, “Anna Komnene and the *Alexiad*”, in M. Mullett and D. C. Smythe (eds.), *Alexios I Komnenos*, Belfast, 1996, pp. 260-302.
20. Nikephoros Bryennios, (introduction, texte, traduction et notes par P. Gautier), *Nicephori Bryennii Historiarum Libri Quattuor*, Corps Fontium Historiae Byzantinae 9, Bruxelles, 1975.
21. T. Gouma-Peterson (ed.), *Anna Komnene and Her Times*, New York and London, 2000.
22. B. Hill, *Imperial Women in Byzantium 1025-1204: Power, Patronage and Ideology*, Edinburgh Gate and New York, 1999, p. 2; Hill, “Actions Speak Louder than Words”, p. 48.
23. 井上「アンナ・コムネナ」, 87-113頁。
24. Neville, *op. cit.*, pp. 183-184.
25. P. Magdalino, “The Pen of the Aunt: Echoes of the Mid-Twelfth Century in the *Alexiad*”, in T. Gouma-Peterson (ed.), *Anna Komnene and Her Times*, New York and London, 2000, p. 22; P. Stephenson, “Anna Comnena’s *Alexiad* as a source for the Second Crusade?”, *Journal of Medieval History 29*, 2003, p. 45; L. Neville, *op. cit.*, p. 182. 相野洋三氏は、この記事についてトルコとのイコニオンの戦いを描いており、マヌエル1世による第二回十字軍の下手際を読み取ることはできないと指摘する(2014年4月6日のビザンツ学会第12回大会(於佛教大学)にて)。
26. F. H. Tinnefeld, *Kategorien der Kaiserkritik in der byzantinischen Historiographie von Prokop bis Niketas Choniates*, München, 1971, S. 154-155.
27. Stephenson, *op. cit.*, pp. 41-54.
28. *Alexias*, XIV, 7, 6, p. 452.
29. アンナが生活した修道院は、母エイレーネーがコンスタンティノープルに創設したもので、彼女はそこで、母や妹、そして自身の娘と同居していた。修道院にはエイレーネーを囲む知識人のサロンがあり、アンナは出入りする知識人と交流し、学問が可能な環境にあった。そのような生活の中で彼女は『アレクシオス1世伝』を執筆する。井上前掲書, 183頁(白水Uブックス, 211頁), 井上「アンナ・コムネナ」, 94頁。
30. R.D.Thomas, “Anna Comnena’s Account of the First Crusade: History and Politics in the Reigns of the Emperors Alexios I and Manuel I Comnenus”, *Byzantine and Modern Greek Studies 15*, 1991, pp. 269-312.
31. Magdalino, *op. cit.*, pp. 15-43.
32. *Alexias*, XIV, 7, 5, p. 452; Stephenson, *op. cit.*, pp. 45, 53.
33. ヘリン前掲書, 320頁 (Herrin, *op. cit.*, p. 240)。
34. Neville, *op. cit.*, pp. 183-184.
35. Buckler, *op. cit.*, p. 40.
36. Magdalino, *op. cit.*, p. 20.
37. 井上「アンナ・コムネナ」, 95-96頁。
38. 井上同論文, 96頁。
39. 片倉綾那「ビザンツ皇女アンナ・コムネナの帝位への挑戦——アレクシオス1世コムネノスの後継者争い(1118-1119年)をめぐる——」, 『ジェンダー史学』第4号, 2008年, 51頁。根津由喜夫氏は、アンナに帝位継承権があったかを疑問視し、彼女の役割を連結器とみるのが妥当とする。根津由喜夫「第10章 コムネノス朝支配体制の存続——アレクシオス1世没時の権力闘争を軸に——」, 『ビザンツ貴族と皇帝政権 コムネノス朝支配体制の成立過程』, 世界思想社, 2012年, 註5, 466頁。
40. 草生久嗣「ロシアービザンツ緩衝地帯の蛮族観について——12世紀ビザンツ史書におけるベチェネグを題材に——」, 『共同利用・共同研究拠点公募プログラム・シンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構築」(北海道大学スラブ研究センター) 報告書』2010年3月, 241-263頁。
41. 佐伯(片倉)綾那「ビザンツ皇女アンナ・コムネナによるヨハネス2世コムネノス批判」, 『女性史学』第24号, 2014年, 12-27頁。
42. G. Dagron, “Nés dans La Pourpre”, *Travaux et Mémoires 12*, 1994, p. 119.
43. V. Stankovič, “La porphyrogénèse à byzance des commènes”, *Recueil des travaux de l’Institute d’études byzantines 45*, 2008, pp. 99-108.
44. *Ibid.*, p. 102.
45. 井上「アンナ・コムネナ」, 91頁; ヘリン前掲書, 310頁 (Herrin, *op. cit.*, p. 232); 片倉前掲論文, 51頁。
46. 佐伯(片倉)前掲論文, 12-27頁。
47. アンナは、アレクシオス1世が孤児院を創設したことを伝えている。ヨハネス2世による慈善施設の付属した修道院創設を意識していたと思われる。以上の仮説は、草生久嗣氏の助言による。
48. 近年、ヨハネス2世時代に注目が集まっている。2013年12月1日に、ロンドン大学キングズカレッジにおいて、ヨハネス2世に着目したシンポジウム “In The Shadow of Father and Son: John II Komnenos and His Reign” が開催された (HP: <http://www.kcl.ac.uk/artshums/depts/chs/eventrecords/2012-13/Komnenos.aspx>, 2014年9月4日閲覧)。またヨハネス2世を論じた博士論文が発表された Angeliki Papageorgiou, John II Komnenos and his era (1118-1143), National Capodistrian University of Athens, Advisor: Athina Kolia Dermitzaki.